

花岡伸明さんの原爆被爆者の苦悩の要旨

戦争の傷跡を一番感じたのは、牧師になるために横浜の関東学院大学に通っていた頃だ。学長の富田富士夫先生は両足に力が入らず松葉杖を使って体を揺らしながら必死に歩いておられた。その原因は、戦時中平和主義者で徴兵を拒否したため投獄され、殴る蹴るの拷問で両足を骨折したにもかかわらず治療を受けられなかったため歩けなくなったことを聞いた。この時、戦後横浜の復興に貢献された立派な方、神学・社会学者として活躍し学長になった方が、そういう扱いを受ける戦争というものを、心から怖いと思った。

原子爆弾と通常の爆弾の違いは、爆発時のエネルギーがけた外れに大きいことと、放射線を出すこと。空気が膨張して起こる爆風で家の下敷きや飛来物に当たって死傷する。また上空で爆弾が爆発した際にできる火の玉は、太陽の表面の2倍くらいの高温なので、それに触れたり近かった人は瞬間的に蒸発したり全身大火傷したりする。火の玉が地上に落ちると、火災が起こり多くの方が死傷する。しかし、これよりも一番タチが悪いのは放射線による被害である。近くで放射線を浴びた人は亡くなったが、残留放射線もあり、直接被爆していなくても爆心地に近い所に救助や家族を探しに行った人も放射線による被害を受けた。また爆発後放射線を含むちりやほこりとして舞い上がったものが黒い雨となって地上に落ち、空気や水も汚染され長期的な健康被害が起こる。

原爆投下時、父は海軍中尉で台湾等に出向き不在で、長崎と佐世保の間ぐらいのところに母と姉と住んでいたため、爆心地からは距離があったが、風下にあったので、母も姉もかなりの放射線を浴びたと思う。戦後父が復員後「こんなところに長く住んではいけない」と、熊本の友人を頼って移動し幼稚園を過ごし、その後小学校は福岡で行った。私の記憶にある母と姉はいつも青白い顔をして床に就いていた。放射能は脊椎に蓄積し造血機能や免疫細胞を傷害し、甲状腺がん等多種のがんや白血病、感染症にかかりやすくなる。私が6歳の時に、数か月の間隔で2人ともがんで亡くなった。母と姉は、政府の決めた範囲以内に住んでいなかったし、また戦後福岡に移り住みそこで亡くなったので、原爆被害者として数えられていないが、こういう人はほかにもたくさんいたと思う。

その後父が医師に私の健康について聞き、「息子さんは10歳まで生きられないでしょう」と言っているのを聞いてしまった。それは6歳の子どもにとっては精神的にとっても大きなショッ

クで、もともと無口だった私は、それからしばらくまったく言葉が出ず話ができなくなってしまった。10歳を超えても生き延びてほっとしたが、その次につらかったのが、今でいう「サイバース・ギルト」、生き残った者の罪悪感であった。「なぜ母と姉のようによい人が死に、自分のようにどうしようもない人間が生きているのか。生きていてごめんなさい」と子供の時から、生きてること自体を罪と感じていた。

横浜の神学校卒業後アメリカに留学して学び、その後アラメダの教会で牧師となった。その時にアラメダに住み全国被爆者協会の会長をしていた倉本寛司さんに出会い、彼を通して多くの被爆者の方に会った。当時西海岸に約700人の被爆者が住み、特に広島被爆者が多かった。それは、広島女学院に二世部というのがあり帰米二世が多く、広島と日系社会の関係が深かったからである。

寛司さんとお会った後、被爆者友の会という、ソーシャルワーカーやボランティアと一緒に被爆者をサポートする会を作った。1979年頃だったと思うが、この時に被爆者をインタビューして録音し、書き起こしてオーラルヒストリーの記録を作り、大学の図書館に入れて研究者の資料にしてもらった。その時被害者は、「ピカドンで亡くなった人はラッキーだった」と一様に言っていた。なぜなら被爆者は皆、いわゆる原爆病、放射能汚染によって次から次に起こる病気だらけの生活に疲れ果てていたからである。また、家族にも体調不良の愚痴は「またか」と相手にされず、もう言えなくなっていたので、被爆者同士が同じことでも話し合えることが心の助けとなった。私が一番若い年代で、お会った多くの方は亡くなった。

広島と長崎の原爆で約22万人、東京3月10日の大空襲の1晩で約10万人、大阪の7回の空襲で約10万人、その他名古屋、神戸、横浜などでも大勢の人が亡くなった。横浜も焼け野原となっていた。日本全体で、軍人と一般市民併せて約300万人が亡くなったといわれている。こんな大きな犠牲を出す戦争の怖さ、どれだけ多くの方が戦中も戦後もどれだけ悲惨な生活をしてきたのか、戦後75年を経て記憶はどんどん薄まってきているが、こういう体験を多くの人に伝えていくことは意義がある。この機会を感謝する。